

# ソーシャルワークにおける「空間」と「時間」についての一考察

## —実存論的分析論をもとに—

田嶋 英行\*

ソーシャルワークは、さまざまな生活問題を抱えるクライアントの援助を専らおこなうものである。その際には、クライアントがどのような「空間」において生活しているのか把握していくことが求められる。一方でそれは、あくまで「時間」の流れに沿って展開されるのであり、そのプロセスが重視される。このようにソーシャルワークにおいては、「空間」と「時間」という2つの「要素」が備わっていると考えられる。しかしソーシャルワークにおいてはこれまで、これらについて「変数」として捉えていく傾向が強く、それらをあくまで客観的に分析する対象として理解してきた。ただしソーシャルワークはクライアント自身の「ウェルビーイング (well-being)」, すなわちその「存在 (being)」を基盤にしたよりよい状態の増進を目的としており、したがってそれらはクライアント自身の観点から、延いては、その「存在」にもとづいて捉えていくべきである。本稿では、人間が実存として存在することをもとに展開された Martin Heidegger による実存論的分析論をもとに、クライアント自身におけるそれらのあり方について論じている。

### I. はじめに

ソーシャルワークは、さまざまな生活問題を抱えるクライアントの援助を専らおこなうものである。そしてその際には、クライアントがどのような「空間」において生活しているのか把握していくことが求められてくる。具体的には、生態学 (ecology) の考えをもとに展開された「生活モデル (life model)」を基盤にした「エコマップ (エコロジカルマップ)」などが、アセスメントツール (事前評価の道具) として用いられることになる。また一方でソーシャルワークは、あくまで「時間」の流れに沿って展開されるのであり、そのプロセス (過程) が重視される。具体的にはインターク (もしくは、エンゲージメント) に始まり、アセスメント (事前評価)、プランニング (計画)、インターベンション (介入)、モニタリング (監視)、

エバリュエーション (事後評価)、ターミネーション (終結) といった、一連の流れに沿って展開されるのである。つまりそのプロセスにおいて、ソーシャルワーク専門職はクライアントが抱えている生活課題の解決に向けて、彼ら自身と「時間」ともにしていくことになる。このようにソーシャルワークにおいては、「空間」と「時間」という2つの「要素」、すなわち、ものごとを成り立たせるもとであり、それ以上に簡単にすることができない固有のものが備わっていると考えられるのである。

しかしながらソーシャルワークにおいてはこれまで、この「空間」と「時間」について、のちほど検討する Carel Germain においてみられるように、「変数 (variable)」(Germain 1976) (Germain 1978) として捉えていく傾向が強かった。なおここでいう「変数」とは、すなわち「対象ごとに備わっているさまざまな特性」(川元 2007: 159)

\*人間学部人間福祉学科

のことであり、さらに「特性」とは、特有の性質のことを意味する。つまりソーシャルワーク専門職やその研究者が、あくまで客観的に分析する対象としてクライアントを捉え、さらにそのうえで、その対象自体に備わっている特有の性質として、「空間」と「時間」を理解していくのである。

Germain は周知の通り、今日のソーシャルワーク界における中核的なアプローチである「生態学的アプローチ (ecological approach)」の代表的論者の1人であり、のちに Alex Gitterman とともに「生活モデル(life model)」を提示した人物である。この「生活モデル」においては、クライアントとその生活を生態学 (ecology) における有機体一般とその環境とのかかわりになぞらえ (見立て) 捉えていくのであり、そしてその際には、「人びととその環境の間における交換を探るためのレンズ (lens) を提供し続けてくれる」(Gitterman 2011 : 281)「生態学的隠喩 (the ecological metaphor)」(Gitterman 2011 : 281) を用いていく。なおここでいう生態学とは、そもそも「生物の生活の法則をその環境との関係で解き明かす科学」(横井 2004 : 1) であり、その対象は植物を含む有機体一般である。さらにそれにおける「生活」とは、生物が「皆、生まれ、成長し、子供をつくり、その子供がまた成長し、生殖をするというサイクル」(横井 2004 : 1) である「生活環」(横井 2004 : 1) が回転し、「世代を超えた存続が行われている状態」(横井 2004 : 1) のことである。Germain と Gitterman が展開した「生活モデル」は、あくまで自然科学としての生態学のメタファーであり、必然的に、それをを用いることになるソーシャルワーク専門職も、自然科学者の隠喩として機能することになる。

このように Germain は、クライアントを、生態学において対象とする有機体一般になぞらえ捉えていったのであるが、しかしながらクライアントと有機体一般は、そもそもそれらにおける存在の仕方がまったく異なっている。前者はただ物存在しているだけであるが、後者は実存として、「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」(茅野 1968 : 93) する。つまりたしかに両者ともに、それぞれの「環境」のなかにおいて存

在してはいるものの、一方でそのあり方自体には、大きな違いがあると考えられるのである。

そもそもわれわれ人間にとって「空間」は、その「中に対象が存在しない状態はすぐに思い浮かべることができるが、空間そのものが存在しない状態を思い浮かべることが決してできない」(Kant = 2010 : 80) のであり、したがってそれは、あくまで必然的に「アプリオリな像であり、すべての外的な直観の土台となるもの」(Kant = 2010 : 80) として規定される。つまり「空間」とは、人間にとって「さまざまな現象が可能になるための条件」(Kant = 2010 : 80) なのである。また「時間」とはわれわれ人間にとって、「何らかの経験から引きだされてきた経験的な概念ではない」(Kant = 2010 : 95) のであり、やはり、あくまでアプリオリに把握されるべきものである。つまり、「時間はすべての直観において土台として利用される必然的な像」(Kant = 2010 : 96) であり、「さまざまな現象を時間から外して考えることはできない」(Kant = 2010 : 96)。われわれにとって「空間」および「時間」はともに、いかなる経験にも先立つものとして規定されるべきものなのである。

たしかにソーシャルワークにおいては、先にも述べたように、「空間」と「時間」という2つの「要素」、すなわち、ものごとを成り立たせるもとであり、それ以上に簡単にすることができない特有の性質があると考えられるのだが、ただしそれらはあくまで、ソーシャルワークを展開するソーシャルワーク専門職の視点から捉えたものである。つまり、彼らがより科学的で客観的な援助を展開するため、そもそもクライアント本人からするならば、あらゆる経験に先立つアプリオリな像として規定されるべきその「空間」および「時間」を、あくまで経験的に把握していくのである。しかしながらソーシャルワークがクライアント自身の「ウエルビーイング (well-being)」(IFSWS 2000)、すなわちその「存在 (being) を基盤にしたよりよい状態」(田中 2010 : 5) の増進がその目的であるとするならば、やはりそれらをあくまでクライアント自身の観点から、延いては、その

「存在」にもとづいて捉えていくべきではないであろうか。もちろんソーシャルワークは、ソーシャルワーク専門職がクライアントに対して提供していくものであり、(ソーシャルワーク専門職がクライアントとともに、彼ら自身が抱えている生活問題の解決を目指していくことが前提としてあったとしても)その援助枠組み自体は、やはり、ソーシャルワーク専門職自身の視点にもとづいて構築されざるを得ない。しかしながらその目的が、彼らの「存在を基盤にしたよりよい状態」の増進にあるとするならば、やはり、彼ら自身の視点にもとづいた「空間」と「時間」の解釈も同時に求められてくると考えられるのである。

本稿ではまず、「生態学的アプローチ」や「生活モデル」を提唱したことによって、現代のソーシャルワーク実践に多大なる影響を及ぼした Germain における「空間」および「時間」の捉え方について、検討をおこなっていく。さらにそのうえで、人間が実存として存在することをもとに展開された存在論である Martin Heidegger による実存論的分析論 (Die existenziale Analytik) をもとに、ソーシャルワークの対象となるクライアント自身におけるそれらのあり方について論じていく。それはつまり、それら2つについて、彼ら自身における経験の内側の観点から、さらにはその「存在」にもとづいて捉えていくということである。そしてそのうえで、ソーシャルワークの実践において、これら「空間」と「時間」の概念をどのように捉えていけばよいのか、考察をおこなっていく。

## II. Germain による「空間」および「時間」の捉え方

Germain は前述の通り、「生態学的アプローチ」や「生活モデル」を提唱したことによって、今日のソーシャルワーク実践に多大なる影響を及ぼした人物のひとりと考えられている。Germain は「ソーシャルワーク専門職は、多くの空間的な課題 (spatial issues) について気づいている。たとえば彼らのオフィスの大きさや位置が、彼ら自身が所属する組織におけるその地位 (status) の情報を伝え得るということ」(Germain 1978 :

515) と述べている。また「ソーシャルワーク専門職は、セッションにおける家族やグループのメンバーが座る位置のアレンジが、グループ内における関係性のパターンについて、さらにはワーカーに対する親近感や距離感について開示することを知っている」(Germain 1978 : 515) と述べている。つまり「空間」というものが、日々のソーシャルワーク実践に、大きな影響を及ぼしていると考えているのである。

さらに Germain は、1) 人間の発達段階に応じた「空間」についての考察、2) 居住する「空間」についての考察、3) 人間における「空間」的行動 (spatial behavior) についての考察、以上3点について述べている (Germain 1978 : 516-522)。そして最終的には「環境が支持的であるならば、創造的な適合と成長が生じる」(Germain 1978 : 522) と述べており、さらにソーシャルワーク専門職はこれまで、ソーシャルワーク実践における社会的環境 (social environment) としての「空間」と「適合」の関係性に気づいてきたが、今後はこのことを「個人や家族、グループ、さらには組織的な介入 (organizational interventions) の水準」(Germain 1978 : 522) にまで推し進めていくことが可能であるという。

Germain はここで、「空間」について、さまざまな文献の内容をもとに考察を進めているものの、実際にはそれ自体をソーシャルワーク専門職の視点から、あくまで科学的に客観的に捉えていこうとする。つまり「空間」を、「ソーシャルワーク実践における生態学的変数 (anecological variable)」(Germain 1978 : 515) として捉えていくのである。もちろん、エビデンス (科学的証拠) をもとに論じようとするその姿勢には、ある一定の妥当性があると考えられはするものの、一方で当然のことながら、クライアント自身の内側の観点から、延いては、その「存在」にもとづいて捉えていくということについては、不明のままである。

一方で Germain は、ソーシャルワークにおける「時間」についての考察もおこなっている。Germain によれば、ソーシャルワークの領域ではこれまで、このテーマについては、ほとんど留意されることがなかったという (Germain 1976 :

419). さらに「時間」というものが、人間が生きていくうえでとても重要な役割を担っているにもかかわらず、注目されてこなかったことについて、「奇妙 (curious)」(Germain 1976 : 419) であるとも述べている。なぜなら、人びとの時間的行動 (temporal behaviors) とその環境における時間的構造 (temporal structure) を理解することが、「実践における付加的次元、およびサービスを構成する際に大きな助けとなる見通しを提供する」(Germain 1976 : 420) からである。

そして Germain は、われわれがもっとも馴染んでいる時計の「時間」以外に、1) 生物学的時間 (biological time), 2) 心理学的時間 (psychological time), 3) 文化的時間 (cultural time), 4) 社会的時間 (social time) の4つが挙げられることを示し、それら4つについてそれぞれ検討をおこなっている。まず1) 生物学的時間とは、環境によって刻み込まれたり学習されたりするものではなく、あくまで「遺伝子においてプログラムされたもの」(Germain 1976 : 420) である。つぎに2) 心理学的時間とは、あくまで経験を通じて学習されるものであり、「人間における継続 (duration) と連続 (sequence) の感覚」(Germain 1976 : 422) である。さらに3) 文化的時間とは、「時間」に対応する文化的態度のことであり、人びとは自らが属する文化によって現在を重視したり、または過去の出来事を重んじたりする、ということの意味している。また4) 社会的時間とは、各個人や家族、さらには組織によってそれぞれの「時間」が異なっており、「層 (layers)」(Germain 1976 : 423) をなしていることについて述べたものである。

さらに Germain は「時間」については、このようにさまざまな観点からアプローチすることができるかと述べたうえで、「交互作用的時間 (transactional time)」(Germain 1976 : 425) について示唆している。ソーシャルワークは、まさに「医学-疾病的枠組み (a medical-disease framework) からシステムもしくは生態学的視座へと移行しつつある」(Germain 1976 : 425) のであり、旧来の枠組みにおいて「時間」は、因果関係という方向に進んでいくものとして理解されてきたが、新

しい視座においてそれは、交互作用的なものとして把握されつつある。そしてこの「交互作用的時間」は、複雑な環境におけるすべての要素と関連する過去から続く現在の交互作用を指向するのである。

Germain はやはり「時間」についても、「空間」と同様に、さまざまな文献の内容をもとに考察を進めているものの、実際にはそれ自体を「ソーシャルワーク専門職の視点から、あくまで科学的に客観的に捉えようとしている。つまり「時間」を、「ソーシャルワーク実践における生態学的変数 (anecological variable)」(Germain 1976 : 419) として捉えていくのである。先に述べた「空間」と同じく、それをエビデンス (科学的証拠) にもとづいて論じようとするその姿勢には、ある一定の妥当性があると考えられる。一方で当然のことながらそれを、クライアント自身の内側の観点から、延いては、その「存在」にもとづいて捉えていくということについては、不明のままとなる。

### Ⅲ. 「世界 = 内 = 存在」と「空間」

前述の通り「空間」とはそもそも、その「中に対象が存在しない状態はすぐに思い浮かべることができるが、空間そのものが存在しない状態を思い浮かべることが決してできない」のであり、したがってそれは、あくまで必然的に「ア・プリオリな像であり、すべての外的な直観の土台となるもの」として規定されるのであった。つまり「空間」とは、人間にとって「さまざまな現象が可能になるための条件」なのである。ただクライアント延いてはわれわれ人間は、実存として、「自分の存在することへ向かって自分を関わせつつ存在」する。さらに Heidegger によれば、「世界 = 内 = 存在 (In-der-Welt-sein)」として、「世界」のうち存在する。そして、われわれが実存としてかつ「世界 = 内 = 存在」として存在すること自体は、「ア・プリオリに見てとられ了解されなければならない」(Heidegger = 2003a : 136)。なおここでいう「世界」とは、「局所的コンテクスト」(門脇 2008 : 99) ともいい得るものであり、それ

は「そのつどすでにつねに、私が他者たちと共に分かちあっている」(Heidegger = 2003a : 307). それはつまり、他者とともに共有する「共世界」(Heidegger = 2003a : 307) として表現し得るのである。したがってわれわれにおける「空間」は、まずはわれわれ自身が「実存」として、かつ「世界 = 内 = 存在」として存在していることをもとに規定されることになる。

ソーシャルワークの領域において、クライアントが実存としてかつ「世界 = 内 = 存在」として存在することをもとに、彼ら自身における「空間」について言及した研究者として、Donald Krill を挙げることができる。Krill は「疎外 (alienation)」(Krill 1978 : 1) に悩む、すなわち自らの存在の意味を把握することができず、自己が不安定な状態にあるクライアントを援助するための援助枠組みを展開したが、彼はその「疎外」に悩むクライアントを、以下の図によって表わしている (Krill 1978 : 101)。

Krill によれば、B は「疎外」に悩むクライアントのあり方について示しており、一方の A は、それに悩むことから解放された後のあり方について記している。

まず B においてクライアントは、「わたくし」に囚われた状態にあり、自己防衛のイメージ (Security Image) に占拠されている。したがってこの場合彼ら自身と他者の関係は、対等であるとはいい難いものとなり、「必然的に孤立し、他者

から疎外される」(Krill 1978 : 101) ことになる。つまりこの場合彼らは、他者を二次的に捉える「局所的コンテクスト」としての「世界」のうちに存在しており、顧慮的に気遣う (Heidegger = 2003a : 313) ことによって、他者があくまで彼らにとって二次的なものとして、その「世界」から現れ出てくる (現象する) ののである。なおこの図において他者は、□や○で表記されている。

つぎに A の状態においてクライアントは「疎外」に悩む、すなわち「わたくし」に囚われた状態から抜け出すことができ、家族や親せき、友人といった重要な他者とのつながりを形成することができるようになってきている。それはすなわち彼ら自身が、「他者とのつながり (the bond with others)」(Krill 2011 : 182) を重んじる「世界 (局所的コンテクスト)」のうちに存在しており、そのうえで「わたくし」のあり方と同等に重要な他者のそれを優先するようになってきている、ということの意味している。そしてそれをもとに、それらの周囲にいる見知らぬひとや敵対する者、知人、同僚、隣人、自身が所属するグループのメンバーといった「他者」や、自然界にあるもの、物体、さらに他からもたらされるさまざまな概念といったものを、意味あるものとして受け入れられるようになっていく (Krill 1978 : 100-101)。つまりこの場合には、彼らが顧慮的に気遣うことによって、他者が彼ら自身と同等に優先すべき者として、その「世界」から現れ出てくる (現象する) ののである。

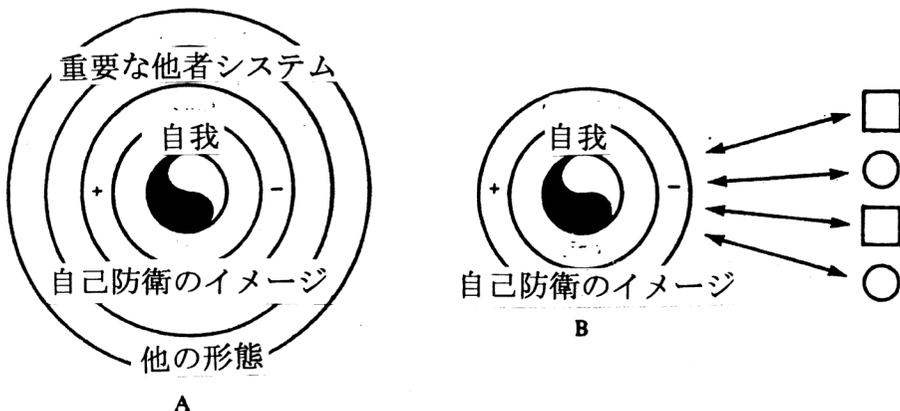


図1 「疎外」に悩むクライアントとそれから解放されたクライアント

Krillによればクライアントがこのように「疎外」に悩み、かつ「わたくし」に囚われた状態にある場合、すなわち彼らが実存として、そのようなあり方へ向かって自分を関わらせつつ存在する場合、前述の通り、「必然的に孤立し、他者から疎外される」、つまり彼ら自身が、そのような環境のなかにあるということになるのである。一方でそれに悩むことから解放された場合、彼らは先に挙げた重要な他者とのつながりをもとに、自らが存在することへ向かって、自分を関わらせつつ存在することになる。それによって、他者を自分と同等に優先するようになる。すなわち彼らは、先の場合とは異なった環境のなかにある、ということになるのである。Krillにおいては、クライアントとその生活を、生態学における有機体一般とその環境とのかかわりになぞらえ（見立て）捉えていく「生活モデル」とは異なり、彼ら自身をあくまで実存として把握していくのであり、したがってその「環境」についても、その実存としてのあり方に応じて規定されていくものとして捉えていく。有機体一般の場合には、ただ物在しているだけであり、したがってKrillが挙げているような、「クライアントの生活環境」のあり方が2通りあるというようなことは、そもそも決してあり得ないのである。

クライアントとしての「環境」は、そのアプリオリな「空間」のなかで見いだされる。そしてクライアント延いてはわれわれ人間は、「空間そのものが存在しない状態を思い浮かべることは決してできない」のであり、さらにこの「空間」自体は、「世界=内=存在」における空間性によって確保されることになる。そもそも、われわれが実存としてかつ「世界=内=存在」として存在することは、「ア・プリオリに見てとられ了解されなければならぬ」のであった。先にも述べた通りわれわれにとって他者は、われわれが顧慮的に気遣うことによって、その「世界」から現れ出てくる（現象する）。そして、そもそもそのような事態が可能になるのは、われわれにとって「世界」が「与えられている」（Heidegger = 2003a : 189）からである。つまり「世界=内=存在」というあり方そのものが、そのうちに他者がある（いる）ことを

「許容する」（Heidegger = 2003a : 289）空間性を、あらかじめ備えていると考えられるのである。

一方で、クライアントの環境を構成するもう一つの要素としての「もの」は、Heideggerによるならば「他者」の場合とは異なり、配慮に気遣う（Heidegger = 2003a : 173）ことによって、その「世界」から現れ出てくる（現象する）ことになるといふ。われわれの身の周りにあるもろもろの道具といった「もの」は、この気遣いによって見いだされるのである。そしてさらに、以下のように述べている（Heidegger = 2003a : 178）。

そのつど道具に合わせて裁断された交渉のうちでのみ、道具は純正におのれの存在においておのれを示すことができるのだが、そうした交渉、たとえば、ハンマーでもって打つことは、この存在者を出来する事物として主題的に捕捉するわけでもなければ、ましてやそれを使用したからといって、道具構造そのものに通暁する知識がえられるわけでもない。ハンマーでもって打つことは、ただたんにハンマーの道具性格に通暁している一つの知識をもっていることではなく、それ以上適切には可能でないようにこの道具を我がものにしたということなのである。

そして、このようにわれわれがハンマーのような道具（もの）を発見できるのは、ひとえに、「世界」が「与えられている」からである。

そもそもクライアントが、「もの」や「他者」によって構成される「環境」をもつことができるのは、彼らが実存としてかつ「世界=内=存在」として存在していればこそであり、そのように「世界」のうちにあるというあり方そのものが、彼ら自身において「もの」や「他者」がある（いる）ことを「許容する」のであり、さらには、そのような空間性をあらかじめ備えていると考えられるのである。

#### IV. 実存として存在することと「時間」

それではわれわれ自身が「実存」として、かつ「世界=内=存在」として存在していることをもとに

「時間」について考えた場合、果たしてそれはどのようなようになるであろうか。先に挙げた Krill においては、これまで述べてきたように「空間」について記してはいるものの、一方の「時間」については十分な言及がみられない。

われわれ人間は、あくまで実存として存在しているものであり、「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」する。すなわち、「おのれの存在においてこの存在自身へとかわりゆくことが問題である存在者として、実存する」(Heidegger = 2003c : 238) ののである。人間が存在しているということは、すなわち自らの存在を氣遣っているということに他ならないのであり、たしかに、顧慮的に氣遣うことによって他者と出会い、さらには配慮的に氣遣うことによって道具などのものと出会うのであるが、「究極的には、ただひたすらおのれ自身の存在へとかわり続けている」(岡本 1980 : 56) のである。

ただしこの「氣遣い」(Heidegger = 2003b : 128) には、その構成契機として『『おのれに先んじて』』ということが必ず含まれている(三富 1980 : 155)。つまり人間には、「おのれが未だそれになってはおらず、やがてそれになるだろう『未了』 Noch-nicht というものが、絶えずつきまとっている」(三富 1980 : 155) のである。そして、この人間における「絶えず将来に向かって動いていかざるをえない実存の根本的な存在遂行の在り方」(寺邑 1980 : 112) を、「企投 (Entwurf)」(Heidegger = 2003b : 37) という。このように人間の存在は、企投という概念によって把握され得ると考えられるのであるが、人間にとってその最極限は、自分自身の「死」である。そして人間は、この企投にもとづいておのれに先んじて死へと態度をとるとき、「不安」の氣分に襲われる。

「死」はわれわれにとってもっとも固かな可能性、すなわち他の誰によっても引き受けることのできない唯一の可能性である。われわれにおける本来性は、「死の可能性の内へと先駆して、選択することがおよそ不可能になってしまう時が、不斷に切迫しつつあることに、覚醒する場合を措いてほかにはない」(三富 1980 : 188)。われわれがこの本来性において存在するとき、自らの「死

へと先駆しその可能性を目指しつつ、おのれのあり方を了解することになる。つまりそこには、すでにつねに「時間性」が潜んでいると考えられるのであり、そしてそれは人間が「おのれの最も固かな存在しうることにおいておのれへと到来する」(Heidegger = 2003c : 58) というように表わし得る。先駆的に決意しつつある人間は、自らの固有性としての「死」へとかわり、その絶対的な非力さを了解することによって自らが責めある存在であることを引き受けつつ、他者やものと出会うのである。ここにおける「責め」は、すなわち、まずは自分が自身の力で存在しているのではないという「非力さ」を意味するのである。そしてこれこそが、先に述べた人間の存在における「企投」と並ぶもう一つの特徴であり、「被投性 (Geworfenheit)」(Heidegger = 2003b : 15) と表記し得るものである。人間における根源的な「時間性」は、「自らの死への先駆—被投性の了解—他者やものとの出会い」というように記述することが可能となるのであり、さらにそれは「到来的に既在しつつ、こうして初めて現在を喚びさます」(三富 1980 : 197) ものとして規定されることになる。

しかしながらわれわれは、必ずしもこのように、つねに本来的なあり方において存在しているわけではない。かえって、頹落したあり方において存在していることのほうが、より自然であると考えられるのである。このあり方においてわれわれは、顧慮的に氣遣うことによって他者と出会い、さらには、配慮的に氣遣うことによって道具といったものと出会うつつも、そうして出会った他者やもの自体がわれわれの存在を意のままにしていると考えられるのである。そして Heidegger は、われわれにおけるこのような平均的なあり方を「世人 (das Man)」(Heidegger = 2003a : 327) と表現している。

われわれはこの「世人」というあり方において、人間における根源的な「時間性」を生きていくことができないのであり、したがってそれ自体も、必然的に変容していかざるを得ない。つまり、それが非本来化していくと考えられるのである。前述の通り本来的な「時間性」、すなわち根源的な

それは、「自らの死への先駆」から発現するが、一方の非本来的なそれについては、あくまで「現在」から発現することになる。「世人」と化している日常的なわれわれは、つねにすでに、顧慮的に気遣われた他者や配慮的に気遣われたもののうちへと自己を喪失し、埋没してしまっている。それらが、われわれの存在を意のままにしているのである。

このようにわれわれは、日常的には非本来的な「時間性」を生きていると考えられるのであり、現在において出会われる他者やものうちに埋没したあり方にある。そして、本来的なそれにおける「自らの死への先駆」としての「到来」は、何か将来自分にとって悪いことが起きるのではないかという「予期」に、さらには「被投性の了解」としての「既在」は「忘却」へと変容していく。人間における根源的な「時間性」は、「自らの死への先駆—被投性の了解—他者やものとの出会い」と記述されるのであったが、非本来的なそれにおいては、「予期—忘却—出会われる他者やものうちへの埋没」と化していく。

われわれは日常的に非本来的な「時間性」、すなわち「予期—忘却—出会われる他者やものうちへの埋没」を生きている。さらに日常生活において、時間を配慮的に気遣いつつ生きている。そしてその際には時計という道具を用いながら、それを了解している。われわれにおける通俗的な「時間」の概念は、この時計という道具の使用によって生み出されていると考えられるのである。

われわれは、日常的に時計によって「時間」を把握している。そしてその際には針の動きを把握することによって、「『今は、ここに、今は、ここに・・・』という具合に、多くの「今」が数えられている」（細川 1980：244）。ただし「その今は、すぐ今ではなくなり、かつ、まだ今とはならぬもの」（細川 1980：244）として理解されるのであり、「時間」は「『今の“流れ”』『“時間の経過”』（細川 1980：244）として了解されていく。そしてこの時計をもとにした通俗的な「時間」の概念は、その「時間」自体を「不斷に事物的に存在する今の連続」（細川 1980：244）として解釈するようになるが、それによってわれわれは、「時間」

そのものが未来永劫、永遠に継続し続けるものと錯覚するようになる。すなわち、「時間の無限性」（細川 1980：245）を信じ込むのである。しかしながら先にも述べたように、われわれにおける本来的で根源的な「時間性」とは、すなわち「自らの死への先駆—被投性の了解—他者やものとの出会い」と記述されるべきもののはずである。われわれにとってわれわれ自身に与えられている「時間」は、そもそも限られているのであり、あくまで有限である。それにもかかわらず通俗的な「時間」概念は、このわれわれにおける根源的な「時間性」を平板化し、さらには隠ぺいすることになる。そもそも「時間」はけっして存在するものではないのであり、あくまで「時熟」（Heidegger = 2003b：249）する。それは「じっととどまることなく、不斷の移行過程の内にある」（細川 1980：194）のである。

われわれが日常的に非本来的な「時間性」に生きざるを得ないのは、「時計」の針の動きをもとに生活を送っている（送らざるを得ない）からであり、そしてこのことが、われわれ自身において、「時間」を「不斷に事物的に存在する今の連続」として理解してしまうことにつながっていく。しかしながらわれわれが、日常生活でそのように存在する（せざるを得ない）のは、われわれ自身が顧慮的に気遣うことによって他者と出会い、さらには、配慮的に気遣うことによって道具といったものと出会うつつ、それらの存在者とのかわりに没入することによって、初めて具体的に実存することができるからである。したがってわれわれに切に求められるのは、日々の生活を送るうえでは他者やものとのかわりに没入しつつも、根源的には先に述べた「自らの死への先駆—被投性の了解—他者やものとの出会い」という本来的な「時間性」を生きていることに気づく、ということに他ならない。われわれ人間にとって、他者やものとのかわりに没入しつつ存在することは「原理的に克服しえない」（仲原 2008：522）のであるが、一方でわれわれ自身が「時間」を非本来的に「不斷に事物的に存在する今の連続」として理解することについては、われわれにとって「克服可能」（仲原 2008：522）であると考えられるのであり、し

たがってわれわれは、自らにおける根源的な「時間性」に気づいていくということが必要になってくるのである。

## V. クライアントにおける「空間」と「時間」をどのように捉えていくべきか

先に検討したように、現在のソーシャルワーク界に多大なる影響を及ぼしたと考えられている Germain は、「空間」と「時間」を、「変数」もしくは「生態学的変数」として捉えていったのであった。なおここでいう「変数」とは、すなわち「対象ごとに備わっているさまざまな特性」を意味するのであり、さらに「特性」とは、特有の性質のことであった。つまりソーシャルワーク専門職やその研究者は、あくまで客観的に分析する対象としてクライアントを捉え、さらにそのうえで、その対象自体に備わっている特有の性質として、「空間」と「時間」を理解していくのである。ただしそれは、クライアントにおけるそれら2者を、分析可能な要素として、すなわち存在するものとして捉えていく、ということに他ならない。しかしながらソーシャルワークが、クライアント自身の「ウエルビーイング」、すなわちその「存在を基盤にしたよりよい状態」の増進をその目的とするならば、やはりまずは彼ら自身が実存として、かつ「世界=内=存在」として存在しているという事実に着目する必要がある。そもそもクライアントにおける「空間」や「時間」は、彼ら自身が（実存として）存在しているという事実からするならば、ただ単純に「変数」として理解するだけでは、必ずしも充分とはいえないのである。

Germain は、今日における中核的なアプローチである「生態学的アプローチ」の代表的論者の1人であり、のちに Gitterman とともに「生活モデル (life model)」を提示した人物であったが、その生態学的な観点は、「個人、小集団、地域をシステムとして一体化する対象把握」(岩間 2010a: 159) を可能にする「システム思考」(岩間 2010a: 160) と相俟って、「エコシステム」(岩間 2010a: 161) という概念が生み出されるに至った。そしてそれは、以下のように説明される(岩

間 2010a: 161)。

エコシステム概念は、そのストレス（問題や障害）が決して一つの要素に起因するのではなく、その上位（下位）システムとの交互作用関係のなかで発生しているという見方を強調する。個人や家族といった小さなシステムだけでなく、それらの上位システムである組織や地域との交互作用も同時に意識化していくことが求められる。こうしたシステム間の交互作用関係の認知と把握は、総体としてのエコシステムという視座を提供することになる。

さらにこの「エコシステム」の概念は、ミクロ、メゾ、マクロといったソーシャルワーク実践における区分の導入を可能にする。「ミクロの実践とマクロの実践は未分化であり、ミクロの実践の延長線上にマクロの実践がなければならない」(岩間 2010b: 192) のであり、「個別支援の蓄積が、社会資源の開発、地域福祉計画の策定や地域福祉の推進、ソーシャルアクション等につながらなければならない」(岩間 2010b: 192) のである。またそれは、「地球環境と相互作用関係にあるというエコシステムの考え方」(岩間 2010b: 192) にもとづいており、あらゆるソーシャルワーク専門職は、「この線上のどこかに位置して仕事をしていくことが求められ」(岩間 2010b: 192) てくる。現在のわが国における国家資格を有するソーシャルワーク専門職としての「社会福祉士」には、「『総合的かつ包括的な相談援助』における専門的機能」(岩間 2010b: 190) を展開することが求められているが、その基盤に据えるべきは、生態学的な観点とシステム思考を融合させた、この「エコシステム」の概念なのである。

本稿においてこれまで検討してきたクライアントにおける「空間」と「時間」についても、生態学的な観点とシステム思考の融合体である「エコシステム」においては、やはり Germain のように、「変数」もしくは「生態学的変数」として捉えていくことになろう。つまりそれらは、彼ら自身に備わっている特有の性質として把握されるのであり、あくまで「要素」として捉えられて

いくことになるのである。たとえば「エコシステム」的観点からソーシャルワークを論じている Elizabeth Hutchison は、「ひとと環境 (person and environment)」という生態学的観点をもとにした「多次元的アプローチ (a multidimensional approach)」(Hutchison 2011: 7) を提示している。まずクライアントの個人的次元(すなわち、「ひと」についての次元)として、1) 生物学的人間、2) 心理学的人間、3) スピリチュアルな人間の3つについて論じており、つぎに彼らにおける環境的次元(すなわち、「環境」についての次元)として、1) 身体的環境、2) 文化、3) 社会制度および社会構造、4) 一対の関係性 (dyads)、5) 家族、6) 小集団、7) 公的機関、8) コミュニティ、9) 社会運動、以上9つについて論じている。つまり Hutchison は、「ひとと環境」という生態学的概念を、「上位(下位)システムとの相互作用関係」によって捉えようとしているのである。さらに彼らにおける3つめの次元として、時間的次元を挙げている。それはすなわち、1) 時計の時間、2) 出来事の時間、3) 過去・現在・未来という一直線の時間、以上3つである。Hutchison はこのように、クライアントとその生活を「エコシステム」的に捉えようとしているが、しかしながらいずれにせよ、ソーシャルワーク専門職が彼らとその環境をあくまで外側から客観的に把握しようとするのであり、その「空間」および「時間」を、あくまで「変数」化し得る「要素」として捉えていこうとするのである。

生態学やシステム思考、さらにはそれらの融合体である「エコシステム」といったもろもろの概念は、「個別支援」や「社会資源の開発」、「地域福祉計画の策定」や「地域福祉の推進」、「ソーシャルアクション」といったソーシャルワーク専門職における多岐にわたる業務をより包括的に説明するには、たしかに便利ではある。しかしながら説明するのに便利であることと、そもそもその説明自体に妥当性があるかは、まったく次元の異なった事柄である。ソーシャルワークが対象とするクライアントは、それが個人であれ、家族であれ、または地域であれ、何らかの生活課題を抱えつつ存在している。そもそもわれわれは、「おの

れ自身が存在しているからこそ、苦しみ、喜び、愛し、憎み、生きんとし、また死なんとする」(岡本 1980: 56) のである。人間にとっては「おのれ自身の『存在』があらゆることを意味づけ、決定する究極的な根拠」(岡本 1980: 56) である。また「逆にいえば、おのれ自身の『存在』に人間がつき動かされ、翻弄されているということでもあるが、それゆえにこそ、おのれ自身の『存在』が人間にとっての最大の関心事となっている」(岡本 1980: 56)。ソーシャルワークはまさに、クライアント自身の「存在を基盤にしたよりよい状態」の増進を目的とするのであり、まずは彼ら自身が実存としてかつ「世界 = 内 = 存在」として存在していることをもとに、その生活のあり方自体をみていくことが求められるのである。

クライアントにおける「空間」は、そもそも、彼ら自身にとって「必然的にアприオリな像であり、すべての外的な直観の土台となるもの」である。また「時間」についても、「すべての直観において土台として利用される必然的な像」として捉えられるべきものである。つまり彼らにおける「空間」と「時間」は、その生活の「土台」として規定されることになるのである。それらは彼らにとって、決して「変数」化したり、もしくは「要素」として捉えたりすることができないものである。また当然のことながら、彼ら自身が抱えるさまざまな生活課題も、その「空間」と「時間」において表出することになるのであり、それゆえ彼らにおけるもろもろの課題は、それらに遡って解釈される必要がある。そしてその際には、彼ら自身が実存としてかつ「世界 = 内 = 存在」として存在しているという前提において、遂行していくことが求められるのである。

## VI. おわりに

冒頭でも述べたようにソーシャルワークにおいては、「エコマップ」といったアセスメントツールを用いることによって、クライアントがどのような「空間」において生活しているのかについて把握する。またはそれは、あくまで「時間」の流れに沿って展開されるのであり、そのプロセス(過

程)が重視される。ソーシャルワーク専門職は、クライアントが抱えている生活課題の解決に向けて、彼ら自身と「時間」をともしていくのである。したがってそれにおいては、「空間」と「時間」という2つの要素が、本質的に備わっていると考えられることになる。一方で、それらの「空間」と「時間」については、あくまでソーシャルワーク専門職の視点から捉えたものである。ただクライアントにおける「空間」と「時間」は、そもそも彼らの生活における「土台」として規定されるべきものであり、それらは彼ら自身にとって「変数」化したり、もしくは「要素」として捉えたりすることができないはずである。

クライアントは実存として、かつ「世界=内=存在」として存在する。彼らにおける「空間」は、その「世界=内=存在」における空間性によって確保されるのであり、彼ら自身が「世界」のうちにあるというあり方そのものに、彼ら自身の「環境」を構成する要素としての他者やものがある(いる)ことを「許容する」空間性が、あらかじめ備わっていると考えられるのである。さらにわれわれは、「おのれの存在においてこの存在自身へとかかわりゆくことが問題である存在者として、実存する」。人間が存在しているということは、すなわち自らの存在を気遣っているということに他ならないのであり、たしかにわれわれは、顧慮的に気遣うことによって他者と出会い、また配慮的に気遣うことによって道具などのものと出会うが、「究極的には、ただひたすらおのれ自身の存在へとかかわり続けている」。この「気遣い」には、その構成契機として『『おのれに先んじて』』ということが必ず含まれている」が、人間にとってその最極限は自らの「死」である。「死」はわれわれにとってもっとも固かな可能性であり、人間における根源的な「時間性」は、「自らの死への先駆―被投性の了解―他者やものとの出会い」というように記述し得ると考えられるのである。「到来的に既在しつつ、こうして初めて現在を喚びさます」あり方こそが、われわれにとって本来的なのである。しかしながらわれわれは、日常的には、顧慮的に気遣うことによって出会う他者や、配慮的に気遣うことによって出会うものうちへと埋没してし

まっている。クライアント延いてはわれわれ人間にとって求められるのは、日常的にはこのように類落したあり方ありつつも、それに留まることなく、自らにおけるこの根源的な「時間性」に気づいていくことなのである。

人間における「存在」の意味は、Heideggerによるならば、すなわち「時間性」(Heidegger = 2003a: 47)である。そしてそれは具体的には、自らの死への先駆において経験される、根源的な「時間性」である。ソーシャルワークにおいてはそもそも、クライアントの「ウエルビーイング」の増進こそが、その目的となるのであった。したがってソーシャルワーク専門職は、実存としてかつ「世界=内=存在」として存在するクライアントが、日常的にはその「世界」のうちで出られる他者やものうちへと埋没しつつも、すなわちそのような「空間」のうちに存在しつつも、一方で「自らの死への先駆―被投性の了解―他者やものとの出会い」というように記述し得る、本来的で根源的な「時間性」に気づいていくよう促していく。さらにそのうえで、クライアント自身がその気づきをもとに(すなわち、その「存在」への気づきを基盤に)、自らのよりよいあり方を模索していくことができるようにしていくのである。そしてそれこそが、彼ら自身の「存在を基盤にしたよりよい状態」の増進を図るということの意味すると考えられるのである。

#### 引用文献

- Germain, C. (1976) Time: an ecological variable in social work practice, *Social Casework*, July, pp.419-426.
- Germain, C. (1978) Space: an ecological variable in social work practice, *Social Casework*, November, pp.515-522.
- Gitterman, A. (2011) Advances in the Life Model of Social Work Practice. Turner, F. ed., *Social Work Treatment* 5th ed., Oxford, pp. 279-292.
- Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. (= 2003a, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅰ』中央公論新社, 2003b, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅱ』中央公論新社, 2003c, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅲ』中央公論新社.)
- 細川亮一 (1980) 「現存在と時間性 (その2)」渡辺

- 二郎 編『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣, pp. 199-247.
- Hutchison, E. (2011) *Dimensions of Human Behavior: person and environment*, 4th ed., Sage.
- International Federation of Social Workers (IFSW) (2000) Definition of social work.
- 岩間伸之 (2010a) 「総合的かつ包括的な相談援助を支える理論」社会福祉士養成講座編集委員会 (編)『相談援助の基盤と専門職 (第2版)』中央法規, pp. 155-167.
- 岩間伸之 (2010b) 「解説総合的かつ包括的な相談援助」における専門的機能の展開」
- 社会福祉士養成講座編集委員会 (編)『相談援助の基盤と専門職 (第2版)』中央法規, pp. 190-192.
- 門脇俊介 (2008)『「存在と時間」の哲学 I』産業図書.
- Kant, I. (1787) *Kritik der reinen Vernunft*, 2. Auflage, Walter de Gruyter & Co. (= 2010, 中山元 訳『純粋理性批判 1』昭和堂.)
- 川元克秀 (2007) 「統計調査の手順と調査技術」福祉士養成講座編集委員会 (編)『社会福祉援助技術論 II (第4版)』中央法規, pp. 154-191.
- 茅野良男 (1968)『実存主義入門』講談社.
- Krill, D. (1978) *Existential Social Work*, The Free Press.
- Krill, D. (2011) *Existential Social Work*. Turner, F. ed., *Social Work Treatment* 5th ed., Oxford, pp. 179-204.
- 三富明 (1980) 「現存在と時間性 (その1)」渡辺二郎 編『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣, pp. 151-198.
- 仲原孝 (2008)『ハイデガーの根本洞察: 「時間と存在」の挫折と超克』昭和堂.
- 岡本宏正 (1980) 「現存在の予備的な基礎的分析 (その1)」渡辺二郎 編『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣, pp. 53-93.
- 田中尚 (2010) 「相談援助における対象の理解」社会福祉士養成講座編集委員会 (編)『相談援助の理論と方法 II (第2版)』中央法規, pp. 1-19.
- 寺邑昭信 (1980) 「現存在の予備的な基礎的分析 (その2)」渡辺二郎 (編)『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣, 95-150.
- 横井洋太 (2004) 「身近な生物とその環境」日本生態学会 (編)『生態学入門』東京科学同人, pp. 1-12.